

半球に FLAIR 画像で低信号を示し、周囲には浮腫による高信号を伴う腫瘍が多発していた。同部位は Gd 造影にて増強され、一部 ring 状の造影効果を示す病変もみとめた。画像所見は当初 toxoplasma 脳症に特徴的な eccentric target sign と考えられ、pyrimethamine, sulfadiazine 投与を開始した。治療開始後も意識障害はさらに進行し、脳浮腫は増悪した。第 14 病日左側頭葉切除による内減圧術を施行。病理組織から diffuse large B cell lymphoma と診断された。本症例のように中枢神経リンパ腫の一部と toxoplasma 脳症は頭部 MRI にて類似した画像所見を呈し、しばしば鑑別困難な場合があるため、治療抵抗性の症例では早期に生検による組織学的診断を検討する必要があると考える。

4 急性心筋梗塞の診断に CT が有用だった症例の検討

湯淺 翔・三角 茂樹・佐藤 政仁*
木村 元政**

立川総合病院放射線科
同 循環器内科*
新潟大学医学部保健学科**

【目的】心筋梗塞急性期での造影 CT の有用性を検討した。

【方法】当院における 2009 年 4 月から 2012 年 3 月までの 3 年間 367 例の急性心筋梗塞 (AMI) の患者のうち、急性期に造影 CT が施行された 14 例について retrospective に画像、心電図、血液検査所見等について検討し、AMI での CT の役割について考察した。

【結果】14 例中全例で造影 CT にて心筋の造影欠損が確認された。8 例では明らかな ST 上昇がなく、7 例では CK, CKMB の上昇なし、7 例でトロポニン T 陰性であった。3 例は造影 CT で診断がついた。

【結論】AMI を疑う例では通常 CAG が実施され CT は行われない。しかし、胸痛の鑑別として行われた AMI 症例の造影 CT では、心電図や血

液検査で診断つかない時期に心筋の造影欠損が指摘できる。

5 BPAS - MRI の経験

登木口 進・関 雅也*・佐藤彩友美*
杉本 麻衣*・小野塚延靖*・小松 憲章**
岡本浩一郎***

小千谷総合病院放射線科・診断室
同 放射線科*
同 臨床検査科**
新潟大学脳研究所・脳外科***

BPAS - MRI は斜台に平行に 2cm 幅で撮られた heavily T2 強調画像の白黒反転で、椎骨脳底動脈系の外観表示に適した撮像法である。我々は平成 22 年 6 月よりルーチン撮影に取り入れた。血管内腔表示の MRA と外観表示の BPAS - MRI を併用する事により動脈硬化、血拴、動脈瘤がより正しく診断された。動脈瘤及び動脈内の血拴は BPAS - MRI では動脈内部が抜けて描出される場合がある事を提示した。脳底動脈周囲の髄外腫瘍や橋梗塞と動脈の位置関係も描出され側頭葉の粗大病変も診断可能であった。BPAS - MRI の臨床的有用性を実感した。

6 CARASIL の MRI 所見

野崎 洋明¹⁾・関根 有美²⁾・西澤 正豊²⁾
小野寺 理³⁾・福武 敏夫⁴⁾・下江 豊⁵⁾
平山 幹夫⁶⁾・柳川 宗平⁷⁾・西本 祥仁⁸⁾

新潟大学医学部保健学科¹⁾
新潟大学脳研究所神経内科²⁾
同 生命科学リソース研究センター³⁾
亀田メディカルセンター⁴⁾
鹿島労災病院⁵⁾
春日井市民病院⁶⁾
飯田市立病院⁷⁾
慶応義塾大学⁸⁾

【背景】CARASIL は HTRA1 遺伝子の異常によって発症する遺伝性脳小血管病である。若年成人